

# 斗南藩基礎講座

## 第6回 女性が見た斗南のくらし(2) 鈴木光子の場合

講師 地域史研究家 三浦 順一郎

日時 令和5年9月21日(木)18:30～

場所 下北文化会館大集会室

## 配布資料の 訂正！

1ページの 1. はじめに から7行目の  
「斗南に移住してから会津若松に戻ってからの**身辺**」



「斗南に移住してからの**生活**と会津若松に戻ってからの**生活**」 **赤字**の部分を挿入し、

**薄い青字**の「**身辺**」を「**生活**」に直す

よろしく申し上げます。

講演者より

# 歴史の雑談

○「厭離穢土 欣求浄土」（えんりえど ごんぐじょうど）

源信の『往生要集』にある。徳川家康は旗竿にこの言葉を書いた。意味は、「けがれた俗世を嫌って離れる。極楽浄土に往生することを心の底から願い求める」である。

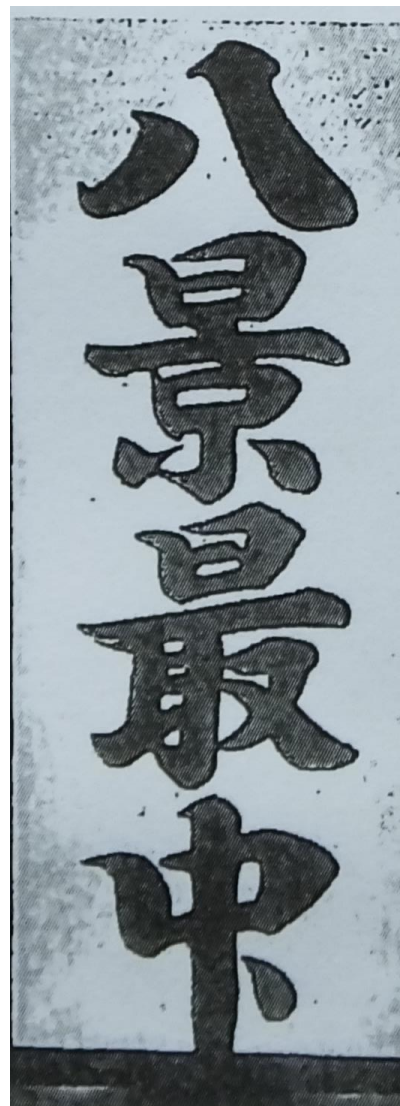
NHK大河ドラマ「どうする家康」テレビの画面には、「土」の脇に「、」を打ってある。

これは、「補空」、「捨て筆」と言われる。または「捨て点」、「咎無し点」と言われることもある。空白がもったいなくて、点を打って埋めたものである。

「中」や「氏」、「民」、「筆」、「弁」などにも、点を打つ字形がある。

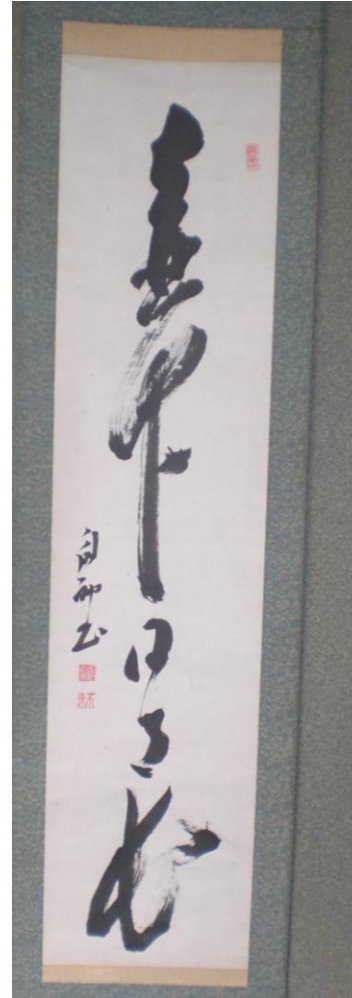
東京の菓子店の回転看板

朝日新聞より



元法隆寺管主 佐伯定胤の書 壺中日月長

壺中日月長  
(こちゅう にちげつながし)



# 女性が記した斗南の記録

女性(婦人)も記録を残した。青森県内の記録が三つある。一つは間瀬みつ(1833~1921)の『戊辰後雑記』である。二つが手代木喜与(1834~1919)の『松の落葉』である。(第5回斗南藩基礎講座で紹介した)

二つの史料は宮崎十三八編の『会津戊辰戦争史料集』(新人物往来社)に収録されている。

三つが鈴木光子(1860~1957)の回想記『光子』である。

# 『光子』から見る、会津女性の生き方

- 鈴木光子(1860~1957) 97歳
- 『光子』は、鈴木光子が斗南に移住してからの生活と会津若松に戻ってからの生活を記録した、貴重な回想記である。
- 光子の傘寿(さんじゅ 80歳)の祝いとして、息子の威が昭和16年(1941年)に出版し、親類縁者に配布した。
- 『光子』は会津若松市立図書館の蔵書にない。古書店にも出回らない、稀覯本(きこうぼん)である。

\* 稀覯本 ➡ まれにしか手に入らない珍しい書物

内容が歴史的価値が大、少部数、入手困難 ➡ 貴重



# 回想記 『光子』の表紙



# 「『光子』のはしがき」から

私は元會津の藩士鈴木丹下重光の長女で名を光子と申します。母は同藩士小野權之丞の娘美和子、私の生れた時、父は二十一歳、母は十八歳で、知行は二百五十石を戴き、何不自由なく育ちましたが、満つれば缺くる世の慣と云ふ諺の通り、戊辰の戦に父は討死いたし、其後色々と艱難辛苦を重ねました。

今は其話を申上げますから暫らく御聞きを願ひます。

(原文の通り)

## (2) 生涯①出生

父の鈴木丹下重光(1839~1868、250石)は軍事奉行を勤め、会津若松の長命寺で負傷して城内で没した。29歳であった。

幕末の京都御所や長州藩・会津藩の動きを記した「騷擾(そうじょう)日記」を残す。

小野権之丞(1817~1889 72歳)

会津藩の公用人・奥番を勤める。幕末から明治初年までの身辺の出来事を記した「小野権之丞日記」を残す。光子の母の美和子は権之丞の長女である。

鈴木光子(1860~1957)は父重光・母美和子の長女として、万延元年(1860)に生まれた。

## ②放浪生活

籠城しなかった祖母と身持ちの母美和子、伯母政子、8歳の光子達は、安全な場所を探して一ヶ月の逃避行を続けた。その間、祖母の自害を宥めすかしたこともあった。一夜の宿を拒否され続け、運よく泊まっても1人1両の高額の宿泊代を請求され、早朝に立ち退けと冷たい仕打ちを受けた。

### ③妹の乳を貰いに行く

逃避行中に妹のおのぶが生まれた。

産後に母が熱を出し、光子が妹を抱いて乳貰いに出かけた。

## ④斗南へ移住

明治3年(1870)8月、祖母と母の美和子、伯母、光子、光子の妹の5人で田名部に移住した。

5人は新潟から外輪蒸気船ヤンシー号に乗り、3日を要して野辺地に着いた。船内・甲板は鮫詰め状態であった。船酔いをする者が多かった。野辺地に暫く居てから、田名部に向った。

藩庁から烏沢に移動せよとの命令があった。

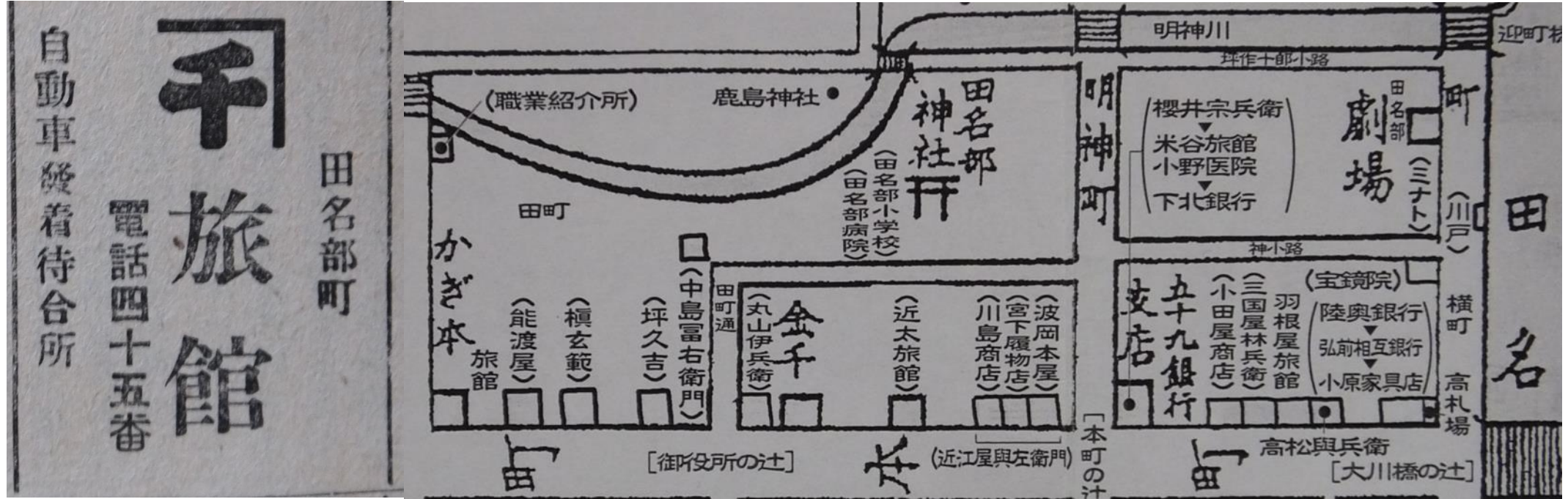
## 田名部のどん底生活 祖母の死

烏沢に向かう途中で祖母が落馬した。腰をひどく打ち、田名部にもどった。それがもとで中気(脳卒中)を起した。田名部の菱千(カネ千)に20日ばかり逗留した。祖母は看病の甲斐もなく死去した。円通寺に埋葬した。\*カネ千(秋濱旅館)

葬式の費用、手伝の手間等、何程かと、世話して下さった方へ尋ねますと、棺代が二両二分、其外色々の費用を合せて、五両かかったと申します。今の身分では、餘りに方外だと思いましたが、今更文句も云えず、泣寝入をする外ありません。

其時は最早蓄えとてすっかり無くなりましたので、戦争の時着て出た衣服を売払って、漸つと支払いを済ませました。

# 下北新報より 田名部畧圖昭和11年5月19日





# 下北新報

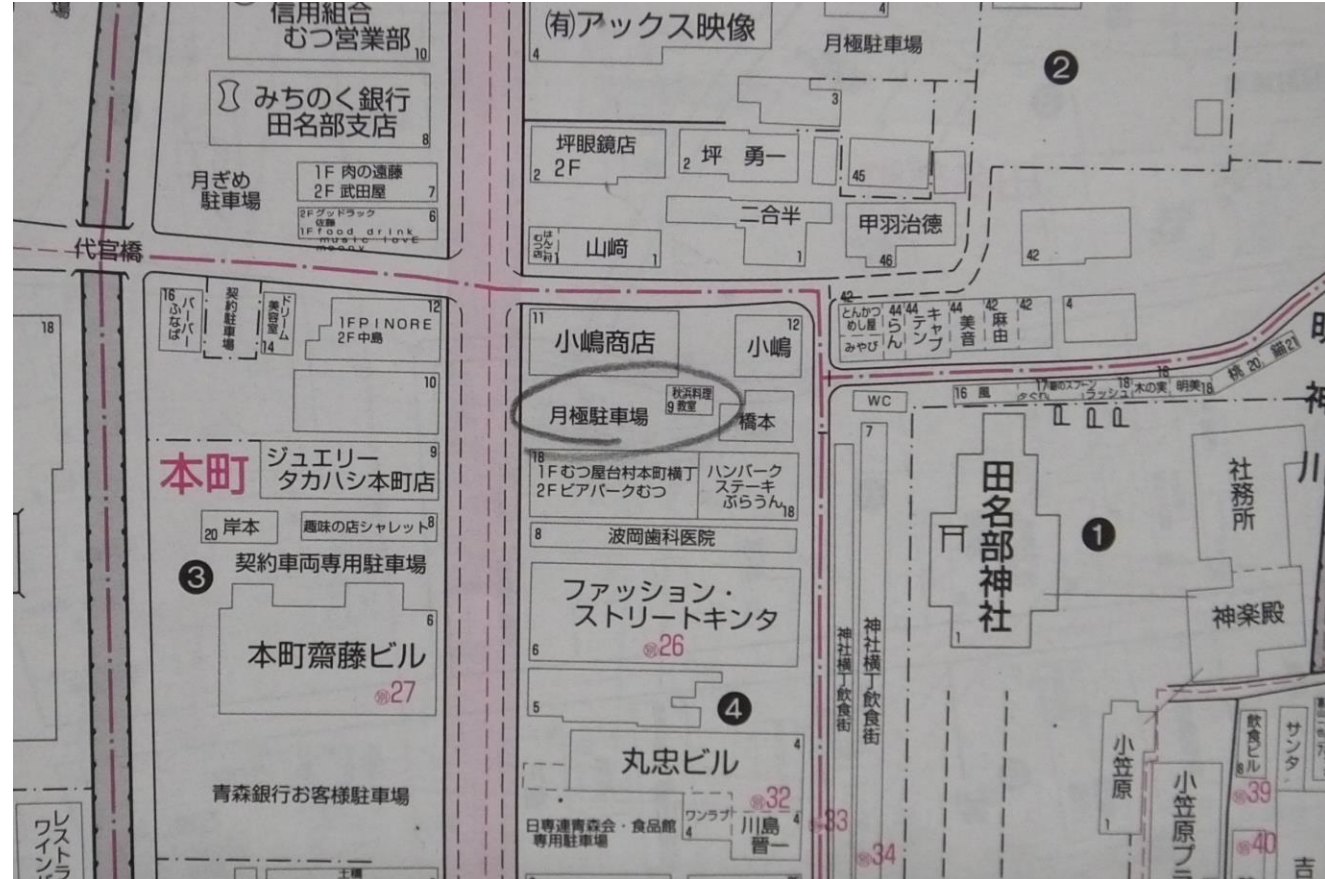
# ゼンリン住宅地図青森県むつ市より

本年も相変わらず  
御引立を願上候  
田名部町

## 千 秋濱旅館

秋濱みよ

電話四十五番



## 無頼漢の二重取り

十日ばかり経つと、隣家の亭主が又もや棺代2両2分頂戴したいと云い出したので、この間支払った筈だと答えますと、「受取書を見せろ」と、若い女許りとあなどり、二重取りをしようと謀らんだのです。知り人はなし女ばかり、欺謀(あざむきはか)られるとは知りながら、受取書を取って無かったのが、此方の落度で、如何する事も出来ません。同藩の葉賀様と云う方から拝借して、其場は済ませましたが、口惜しくて口惜しくて堪りませんでした。段々後から聞きますと、近所でも相手にする者もない無頼漢であったそうです。

## ⑤一家の生計

母は着物の仕立ての針仕事を探した。他国者に注文をよこす者はなかった。賃仕事はなく、菓子粉挽きの内職や柴の枯枝を束ねて売る生活を1年ほど続ける。光子は浜から昆布を拾って、オシメにして食べた。まずくて喉を通らなかった。

「どんな辛い思いをしても良いから、ご飯だけは十分食べてみたい」と光子は我儘を言って、母からひどく叱られた。母はどん底生活を憂い、「四人を帯で結んで深瀬に落ちて死ぬ方がましだ」と、泣く泣く相談したこともあった。

## ⑥野辺地で暮らす

父の下役であった吉野様の斡旋で、野辺地の金持ちで徳望家の三ツ星家(当主西村金之丞)に、光子は預けられた。光子が亡くなった三ツ星家の娘とよく似ていた。是非手元で愛育したいという希望であった。

三ツ星家では、光子は何不自由なく暮らしていたが、田名部に帰りたくなった。拝みたおして、船で田名部に帰ることにした。

### ◆野辺地の三ツ星家

野辺地の豪商で、当主は西村金之丞であった。家印が三ツ星である。西村家は野辺地を拠点にして北前船交易で財を成した。

## 囚人と同船するのはいや(原文の通り)

小さい舟に、囚人が二十人ばかり乗り、頼りに思ふのは吉野様の知人だけです。午過ぎになりますと、風が烈しくなりまして、船は木葉の様に浪に揉まれ、私は全く生きた心地もなく、まるで死んだ様になって了ひました。その内に風の向が變つて横に吹いてきましたので、田名部の方へは着けられず、六里先の川内へ日の暮れぐれに着きました。

囚人は皆宿屋へ泊りますから囚人と一ツ宿へは泊められぬと、色々心配して呉れ、或る商家へ私一人丈泊らせられたので、心細さに大聲を擧げて泣出しました。然し其家の主婦が親切に、菓子を出して、色々慰めて下さつたので、漸く其夜を明しましたが、翌朝も船で田名部へ戻るのだと聞かされ

「船はもう懲々(こりごり)ですから、どんな難儀をしても、陸地をお連れ下さい」と我儘(わがまま)を申しました。其為め囚人は船、監視人は私に付いて陸地を歩き、六里半の道を草履ばきで、随分苦しみながら、漸つと田名部在の我が家へ送られて歸りました。(原文の通り)

## ⑦働く光子

光子は山へ柴採り、海へ昆布探しに行った。花簪を拵えて売りに歩いた。「どうぞ買って下さい」と言って歩くと、不便の者よと求めて下さる方もいましたが、狭い土地であるため二度と買ってはくれなかった。

## ⑧母の戒め

母は常々「**何程貧苦に迫っても操を破るようなことがあってはならぬ、又決して盗み心を出してはならぬ**」と堅く戒めた。



## ⑨大参事(副知事)の野田豁通の官邸で働く

給仕として青森県庁で働いていた柴五郎は、野田豁通の官邸で働いていた鈴木光子と2ヶ月くらす。

光子は野田の屋敷で小間使いをし、茶道具の掃除、来客に煙草盆やお茶を差し上げていた。空き時間に手習い、針仕事をした。夜に野田は福沢諭吉の世界地理入門書『世界国尽』を教えた。母から離れて寂しがる光子を叱咤激励した。

# 明治5年頃の光子と野田豁通



## ⑩留学と学問を催促する

光子も山川浩の妹の山川捨松のようにアメリカに留学して、勉強したかった。しかし、母は長女を手放したくなく、光子は断念した。

野田 豁通 (のだ ひろみち 1844～1913)



# 野田豁通について

熊本藩士。戊辰戦争では奥羽で奮戦した。函館戦争では軍監として、五稜郭攻撃に功をなした。戦後は胆沢県（岩手県北部と宮城県南部の管轄）の少参事、弘前県の大参事（副知事）となった。野田の進言により、県庁が弘前から青森に移転した。野田は青森が政治、経済の中心地になることを見通していた。官選の初代知事（権参事）となった。柴五郎は野田のお陰で青森県庁の給仕をした。

野田は討幕派、佐幕派の差別はなく、人物本位で書生に取り立て、人材を養成した。野田のもとからは、柴五郎（会津藩、陸軍大将）、後藤新平（仙台藩、満鉄総裁・東京市長）、斎藤実（仙台藩、総理大臣・内大臣）、林田亀太郎（熊本藩、衆議院議員）らが輩出した。

後藤新平



斎藤 実



柴 五郎



林田亀太郎



彼等は高い眼識をもつ野田に見出されたと言っても過言でない。

野田は斗南藩士授産の件で菱田重禧と意見が衝突した。漸進主義の野田と急進主義の菱田は氷炭相容(い)れないものがあつた。明治五年(一八七二)に大参事の職を辞した。東京に出てから陸軍に入った。

五郎に陸軍幼年生徒隊(陸軍幼年学校)への受験を促した。

光子にも東京遊学の便宜をはかった。慈心を持ち合わせていた。五郎と光子は野田の恩恵を終生忘れなかつた。



# 女子留学生

明治4年(1871)11月12日、最初の留学生として米国へ留学した。岩倉具視大使と同船した。中江兆民もフランス国留学のために同船した。

吉益亮子	15歳	東京吉益正雄の娘	眼病にかかり 翌年帰国
上田悌子	15歳	上田駿の娘	病にかかり帰国
山川捨松	12歳	青森県士族山川与七郎の妹	
永井繁子	10歳	静岡県士族永井久太郎の幼女	
津田梅子	8歳	東京士族津田仙弥の娘	

# アメリカ留学女性5名



左から山川捨松(12歳)  
津田梅子( 8歳)  
吉益亮子(15歳)  
上田貞子(15歳)  
永井繁子(10歳)  
ワシントンで撮影

# 結婚当時の山川捨松

- 山川捨松(1860～1919)



大山巖と結婚し、鹿鳴館の  
貴婦人とよばれた。社会奉  
仕に尽力。

津田梅子(1864～1929)



女子英学塾(現、津田塾大学)を創立した。近代女子教育の先駆者。

令和6年度から5000円札に登場する。

# 恐山の見学(1)

田名部の北三里に、恐山といふ火山があります。内地では見られぬ面白い所だから是非見物してはと勧められ、家の母等と一所に登つて見ました。其話を致しませう。

此の恐山は、釜臥山といふ恰度釜を伏せた様な山の後にありまして、田名部、大畑、川内から、それぞれ三里あると、云はれて居ります。其途中には、一軒の住家すらなく、森々とした樹立を過ぎますと、別れ道があり、其所に行手を指差した石地藏が淋しく立つて居ます。

山の形は、蓮華の中の様であると申します。入口の三途の川には、大きな太鼓橋が架かり、盗み心のある人は、決して渡る事が出来ぬといふ古からの申傳へがあります。(原文の通り)

## 恐山の見学(2)

二三丁進むと、正面に大きな地藏尊が安置され、左にお寺、右に長屋が幾軒か並んで居ります。此の家は、山へ登る人のために、設けたのだそうですが、全くの無住で世話する者は誰れも居らず、登山者は、米味噌薪炭等一切自分で持参し、只居室丈を借りるのです。私共も、米味噌などを馬に付けて上り、此の長屋で一晩泊まりました。(原文の通り)

## 恐山の見学(3)

翌日は、案内者を雇ひ、地獄廻りを致しました。先づ第一に、弘法大師の立てられた塔婆、之れは根下は何ともなくて、上から段々腐つてゆくと云はれて居ります。血の池地獄、念佛地獄、鍛冶屋地獄様々の地獄が御座います。何しろ、硫黄山の事ですから始終あちこちから湯が湧出しますので、草履では歩けず、下駄を借りて履きました。入浴の出来る温泉場が三ヶ所あつて、何れも草津同様萬病に効能があると、云傳へて居ります。又此山は活火山故、始終鳴動して物凄く、誠に、気味の悪い所であります。 (原文の通り)

## 恐山の見学(4)

二日程見物して、神家へ歸りました處、奥様は、妊娠中の御養生の爲め、御國元へ御歸りになりましたので、私も残念ながら、お暇を頂き、我家へ戻りました。(原文の通り)



## ⑪柴五郎との別れ(明治5年)―①

「御屋敷の書生は、會津藩の柴五郎様と眞柄と云ふ方で、柴様は私同様野田様の御同情に依つて、御世話になつて居られたのであります」

「書生の柴様は、それより少し前に、野田様の御世話で、勉強の爲め上京なされ、谷干城様の許で切磋琢磨の甲斐がおりになり、只今では陸軍大將に御榮進遊ばされたので御座います」

## ⑪柴五郎との別れ(明治5年)―②

五郎は勉学のため、東京に行くことを決心する。前の晩に野田豁通に挨拶に出向いた。その時の様子である。

「出発の前夜、野田豁通に感謝の言葉をくりかえし述べ、長岡氏一行の宿舎にむかう。野田氏の妾おその、会津出身の武士の娘にて小間使として勤むる鈴木ミツ女、下女とか等、宿舎金沢屋の付近まで送りきて、親切なる言葉あり、さすがに眼頭あつくなれり。」

『ある明治人の記録』(34版84頁・改版再版97頁)

## ⑫ 会津に帰る

光子が13歳の明治6年(1873)10月に、一家は会津に帰る。3年半も斗南に居住した。

出立の日に近所の人達が大勢見送った。陸路で23日を要した。

## ⑬父の遺骨を発見

会津に帰って5年ほど経って、若松城の空井戸附近で、父の遺骨と着物の小切れを偶然見つけた。

# 鶴ヶ城の井戸跡



# 父の遺骨を拾う

搔筆(かきむ)しられた雑草の中に、土に塗(まみ)れた白骨や、ぼろぼろの衣切(ころもきれ)が此所彼所(ここかしこ)に散らばつて居ります。傘の先で彼れ是れと選り分けて居ますと、不思議にも私の柄の先きに當つた白骨。見る見る内に骨の髓の方から、赤く血が滲んで参ります。私は恐さの餘り蝙蝠を投げ出しました。母は之を見て、「骨肉の縁しがあれば白骨も赤み、又は自分の鼻から血の出る事があると聞えて居る、父の遺骨かも知れぬ」と申します。猶ほよく探しますと、小切が二三見當りました。之れは確かに、父の肌着の切に相違ない、御出陣の時御着せ申したものに違ひない。(原文の通り)

## 父の遺骨を拾う

それならば、この白骨は、父のものかと懐かしく、恐ろしさも忘れて、蝙蝠の柄で尚もあたりの白骨を調べますと、血の滲み出るのがあちこちに御座います。正(まさ)しく父の御手引きと存じまして、此の白骨を拾ひ上げ、一纏(ひとまとめ)に致し、小切れと共に、骨壺に入れて阿弥陀寺に持参し、戦死者の遺骸を葬った場所の南東の隅へ懇ろに埋葬致しました。  
(原文の通り)

# 阿弥陀寺

会津若松市の七日町駅の向いにある。まちなか周遊バス「あかべえ」・「ハイカラさん」が駅の建物の入り口前に停車する。



# まちなか周遊バスあかべえ



# まちなか周遊バス あかべえ



# まちなか周遊バス ハイカラさん



# 阿弥陀寺の御三階（会津若松市七日町）



# 阿弥陀寺

70



# 鶴ヶ城本丸の御三階の発掘現場



# 発掘の説明

## 御三階跡 (おさんがい あと)

ここには本丸内唯一の高楼建築「御三階」がありました。藩主の御休息の間のすぐ背後に位置し、限られた人しか近づけなかったと考えられます。

戊辰戦争(1868年)でも焼失することはありませんでしたが、戦いの後、戦闘によって本堂を失った市内の阿弥陀寺へ建物は移築されました。

大正年間に城跡公園として整備が始まってからも、建物のあった石垣は残り、会津若松市としては将来、再び往時のような姿でよみがえらせることも含めて、城跡全体の整備計画の中で検討しているところです。

現在は、石垣が積まれたところやその周囲の地面の中に、むかしのことを知る手がかりがあるかもしれないとして、発掘調査が行われています。

A multi-story building called the *Osangai* (the three-story building) once stood here. It is told that this building was an important place for the lord to consult in secret with his chief retainers. Excavation is under way with the goal of restoring the building to its original state. The building itself is currently located at Amida-ji Temple here in Aizu Wakamatsu City.

这里曾建有一座被称为“御三階”的阁楼。据说藩主(诸侯)与重臣密谈的场所。戊辰战争后，露出地面部分的阁楼建筑被移建到市内的阿弥陀寺院内。为重现大正时代(1912-1926年)时的鹤城全貌，包括为在原址重建此阁楼的各種調査準備工作正在進行中。

여기에 「おさんがい」라고 불리는 누각건축이 세워져 있었으며, 이 곳에서 영주와 충신들이 밀담이 이루어졌다고 전해됩니다. 1868년의 보신 전쟁 후에는 시내에 있는 아미다지라는 절의 경내에 이축되어졌으며, 현재는 복원을 위한 발굴조사가 진행중에 있습니다.

這裡曾建有一座被稱為「御三階」的閣樓。據說藩主(諸侯)與重臣密談的場所。戊辰戰爭後，露出地面部分的閣樓建築被移建到市內的阿彌陀寺院內。為重現大正時代(1912-1926年)時的鶴城全貌，包括為在原址重建此閣樓的各種調查準備工作正在進行中。



阿弥陀寺(市内七日町)に現存する御三階



御三階の再現イメージ図  
(会津若松市ホームページより)



史跡若松城跡総合整備計画における復元イメージ図 (会津若松市ホームページより)

# 御三階

かつて鶴ヶ城本丸の庭にあった木造三階建ての建造物である。望楼あるいは密議場所に使用されていたといわれている。東軍墓地に埋葬された戦死者を慰霊するために、阿弥陀寺の本堂として明治3年に移築された。



# 東軍墓地

戊辰戦争で戦死した会津藩士などの東軍兵士の1281体を、会津各地から集めて埋葬した墓地である。

当初、墓標は「殉難之霊」と書かれた。しかし西軍中心の明治新政府の命令で撤去され、「戦死墓」としか許されなかった。

# 戦士墓



# 斎藤一の墓

新選組副長助勤の剣客で、戊辰戦争では土方歳三が会津を離れた後も最後まで会津藩とともに戦った。明治以降は藤田五郎と改名し、72歳の時に東京で亡くなった。遺言で墓は阿弥陀寺に建立された。



## ⑭光子の結婚

明治11年(1878)の夏に、18歳の光子は伯母の政子の長男の久孝と結婚した。久孝は会社勤めをするが、勤務会社が倒産した。その後数社に勤め、最後は滋賀県の商業高校の教諭となった。

# 鈴木光子について

## 主婦時代の鈴木光子



## ⑮夫の久孝の死

明治24年(1891)9月に、35歳で久孝が病没した。光子はまだ31歳であった。

## 光子が母について語る(1)(原文の通り)

境遇は人を創造るとか。人の性質は其環境に依つて變化致します。然し持つて生れた性根は、どんな事があつても、そう變るものではありません。意志の強固な人程境遇に支配されても、性質を變へぬものと存じます。

素より女ながらも會津魂の凝つた母、二十六歳の若さで夫の討死に遭ひ、家は焼かれ、扶持に離れ、南部恐山の麓、罪人か無宿者の住ふ田名部へ移り、而かも年頃近い娘と乳飲子、老母を抱へての憂き艱難。普通の女ならば其境遇に堪え兼ねて、身の破滅となるのが當然であります。

## 光子が母について語る(2)(原文の通り)

有金は騙(だまさ)られ、住家は月洩る荒家。山柴を集め、海草を採り、黒米に昆布の粥を啜つて漸く其日を送るどん底生活に落ち、死ぬより辛い境遇に陥つても、昔の軍事奉行の奥方といふ見識は捨てません。貧しても人には屈せず、卑賤い心は微塵も起さず、皆を勵しつつ家を支へた其苦心は、自分の母ながら、全く見上げたものと存じます。

この母なればこそ大参事の野田様から娘を修行に遣わせと望まれても直ぐに、二ツ返事で差出しません。東京へ連れて行かうと、御親切な仰に對しても、一應は御斷りをする見識を持ち、何所迄も負じ魂が、心の底に残つて居たので御座います。



## 光子が母について語る(3)(原文の通り)

尤も悪い人から騙(かた)り謀(は)かられたのが因で、他人を見れば盗人と思へと云ふ猜疑心が、幾分かは手傳つて居たのかも知れません。

然し生れながら男勝りの気性。家族には、自分より十歳も上の出戻りの小姑があり、中々面倒であつたのにも拘はらず、父の戦死後は一家の主婦として、萬事取捌(とりさば)いて居つた手腕などは、良家の妻女には一寸出来にくい處であります。

又永年の習慣で女々敷い所は少しもなく、勝気的一面に、愛着深く、同情心の強い、人に頼まれれば何んでも引受けると云ふ義心も、かなり強かつたと存じます。

## 光子が母について語る(4)(原文の通り)

晩年、私共が横濱に住居致して居りました時、暇で困るからと申して、横濱小学校の裁縫の先生を勤めましたが、生徒から敬ひ親しまれ、辞職の時などは大層惜まれました。其時の生徒が、銀座の宮田時計店に嫁ぎ、家事取締旁々女中達に裁縫を教へて頂き度いと頼まれ、同家へ参つて居た事もあります。

平素は温和で御座いますが、理に戻り道に背きますと、厳しく叱られます。

前にも御話した様に、土屋新平伯父から、「父の遺言に背むくか」と、云はれた時、彼れ程苦しめられた分家の倅小太郎を養子に決められました。又あれ程御親切な野田様の御世話、鈴木家の出世の基を断つて、若松の哀れな詫住居も辞せられなかつたので御座います。

## 光子 母について語る(5)(原文の通り)

土屋の伯父が恐い為めだらうと御思召すかも知れませんが、決して左様ではなかつたのであります。小太郎が修業に失敗して歸りました時、若松を通りながら私の宅へ立寄らぬのをたてに、母から分家へ、小太郎の養子離談致しますと、又ぞろ土屋の伯父から父の遺言と、大變な剣幕で嚴重な掛合がありました。母は頑として承知しません。遂に伯父は伯父姪の縁を切るからとまで成されましたが、夫れでよろしいと、母は素志を貫徹されたのであります。

此様に、一家の主婦として立派に、とは申せぬ迄も、人の口車に乗らず、世間から輕侮せられず、安泰に子女の養育を果たし、一家を保つて行かれました。

## 光子 母について語る(6)(原文の通り)

尤も初めは、年若な後家と小娘ばかりの一家でありましたから馬鹿にして、詐偽や陰謀で、家庭を紊(みだ)す様な企てをする者もありましたが、却つて母に看破され、二度と出入の出来ぬ様怒鳴られた者も二三に止まりません。

遂に鈴木の後家はしつかり者で、滅多な口は聞けぬと迄評判になつたのであります。

しつかりした女丈夫であつたからこそ、女子ばかりの鈴木家に瑾も付かず、立派に繁榮する事が出来たのだと思ひます。

彼れを思ひ、此れを思ひますと母は、全く鈴木家の柱石に違ひなかつたと信じて疑ひません。

### (3) 鈴木光子の喜寿(きじゅ 77歳)の祝宴

#### ①65年ぶりに柴五郎に再会

昭和12年(1937)に東京目黒の雅叙園で催した。  
65年ぶりに柴五郎と再開する。五郎は77歳、光子も77歳になっていた。

快く出席した五郎の温かさを感じる。

## ②鈴木威の末娘の壽子の話 （原文の通り）

柴さんは、北京義和団の乱のとき、援軍が来るまで50日  
余り少数の守備兵を指揮し巧みに戦い、各国の公使館と居  
住する多くの婦女子を守った軍人として国際的に高い評価を  
受け、国内でもとても人気の高い人でした。そんな方の前で  
余興として琴を弾くように言われていた10歳の私は、祝宴が  
始まって胸がドキドキして、ご馳走も喉を通らなかったの  
です。柴さんは軍服ではなく平服で出席されていました。その  
せいか、柴さんと祖母のふたりは、楽しそうに会話をはずま  
せるお友達というふうに見えていました。

◆『65年ぶりに再会した斗南藩士の子女』  
柴五郎                      と                      鈴木光子



## (4)光子の死

鈴木光子は、昭和32年(1957)に97歳で没した。

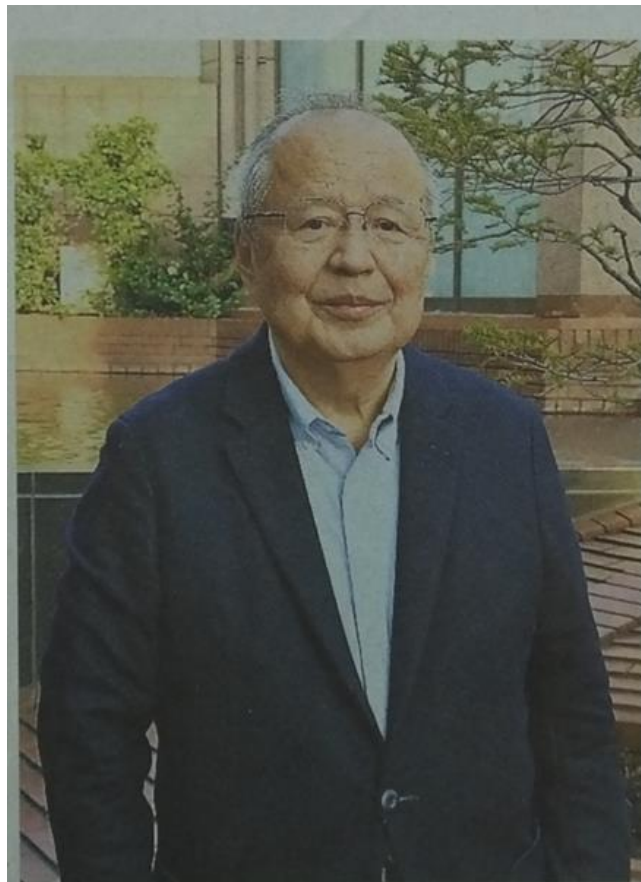


## (5)息子の威の言葉（原文の通り）

今日の長寿を保ち、世間から仕合者よと羨望せられますのは、母の訓と母の愛に励まされ、世の辛酸と情理とを嘗め盡されて、曲らず、阿（おも）ねらず、従順に人生の荒波を乗り越えて参られた賜とも謂い得るでしょう。

幼少時代から幾多の艱難辛苦を突破された結果、自然に人格も出来、修養も積み、今日の福德円満に達せられたものと信じます。

# 曾孫の鈴木 晋(すずきすすむ)



東奥日報より

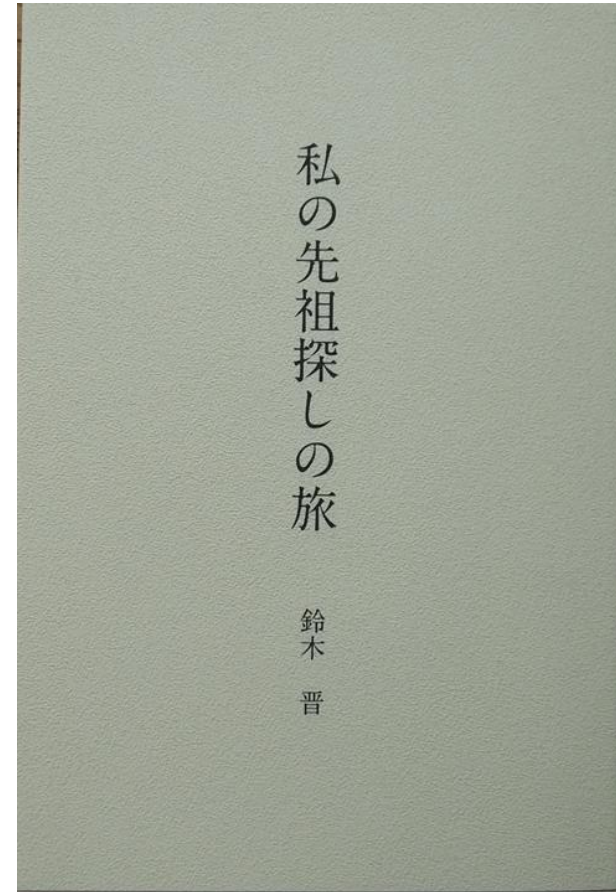
鈴木晋著 『私の先祖探しの旅』

2016. 3. 3発行

曾孫の鈴木晋は、高祖父・曾祖母がかつて勤務・住んだ場所(京都、米沢、新潟、白石、仙台、函館、むつ、野辺地、青森の等の15市町村)を、8年間探し続けた。

そのことを『私の先祖探しの旅』に著した。

\* むつ市立図書館にある。



# 終わりに

戊辰戦争で女性も過酷な生活をしいられた。それでも女性  
性は逞しく生きぬいた。鈴木光子もその一人であった。

先人の遺産を継承し、後世に伝えることが現世に生きる人  
の責務である。

歴史は暗記ものではない。歴史を勉強することは、人間の  
知恵を学ぶことである。人間の生き方を学ぶことである。

# 次回予告

ご清聴ありがとうございました。

次回は、

「藩士の活躍 秋月悌次郎 小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)が神様のような人と称した 剛毅木訥な教育者」です。

すごく難しい内容です。それでもがまんできる方はどうぞお越してください。

午後6時30分から、当会場で実施します。お待ちしております。